氏名	小 高 康 彦
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 213 号
学位授与の日付	昭和42年 3 月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学位論文題目	**子宮頸癌骨盤壁リンパ節転移に関する研究 特に予後因子に及ぼす影響について**
論文審査委員	教授 橋 本 清　教授 田 中 早 苗　教授 妹尾左知丸

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

子宮頸癌の予後，再発転移に関する研究の一環として昭和31年 8 月より34年12月までに，岡山大学産科婦人科教室において子宮頸癌根治手術を受けた 430 例について，骨盤内リンパ節転移を中心に組織学的検索（リンパ節，原発巣，旁組織，腟壁における癌の拡がり，血管侵襲，ＣＰＬ分類等）を行ない予後との関連について追求した。その結果臨床上，特に予後との関連において，幾つかの興味ある知見を得た。その主なものは次の通りである。

1) リンパ節転移がない症例でも，癌死した症例は，5 年治癒した症例に比べると組織学的癌の拡がりが著しい。一方リンパ節転移があっても 5 年治癒した症例は，その転移リンパ節における癌浸潤度が浅く限局している。これらのことから，癌の治癒率向上の最良の手段が早期発見にあることを実証していると共に，早期発見さえすれば，現在我々が持っている岡林式で十分治癒しうることを物語っている。

2) 総腸骨節転移のある症例では，かなりの進行癌であり予後は極めて不良である。更に手術野を拡げて完全剔出を試みてもそれ以前において同程度の一次リンパ節の完全剔出が行なわれなくては予後の向上は期し難い。

3) 転移リンパ節の癌浸潤度は予後と密接な関係が認められる。癌死例においては浸潤度Ⅲ度のものが74.0%を占め，複数転移が65.0%を占めている。

4) 手術時転移が疑われるリンパ節があれば，その剔出と共に，その周囲の小リンパ節の剔出に特に注意しなくてはならない。そして強力な個別化した術後照射の併用が必要であり，また効果を期待しうる。

5) 当時岡山大学で行なっていたレ線術後照射は，少なくとも延命効果があることを認めた。

6) リンパ節転移陰性例においては，その再発例のほぼ半数近くが遠隔再発であった。この成績は早期癌においても，術前照射の併用が必要であることを推測せしめるものである。

日本癌治療学会誌　第2巻第1号（昭和42年1月30日掲載予定）

論文審査の結果の要旨

本研究は頸癌根治手術例で5年成績の判明している570例についてリンパ節転移の実態について予後との関連を調査したものである。

よって本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。